

研究主題

奉仕体験・勤労体験活動の指導に関する研究

目次

索引 「奉仕」導入に当たっての学校の課題と対応策	4
研究の概要	5
I 教科・科目「奉仕」を学ぶ意義	6
II 「奉仕」の学習の構成	
1 「奉仕」の学習過程	8
2 学習計画の10のステップ	9
III 奉仕体験活動の内容	
1 奉仕体験活動の分野	10
2 奉仕体験活動の実践例	12
3 活動の留意点	20
IV 教科・科目「奉仕」導入の準備過程と留意点	21
V 研究のまとめと今後の課題	22

＜研究の成果と活用＞

- 1 東京都設定教科・科目「奉仕」の学習内容の明確化
○生徒の主体的な活動を促すための学習過程を明確にした。また、授業で活用できるワークシートを開発し、豊富な実践事例をまとめた。
- 2 指導資料の作成
○指導上・実施上・組織上の留意点を明確にし、課題と対応策を分かりやすくまとめた。さらに、「奉仕」導入の準備過程と留意点を分かりやすくまとめた。
- 3 「奉仕」推進者養成研修の在り方
○校内での指導計画作成や授業実践の中心となる教員を養成する研修の在り方をまとめた。

本紀要の特徴は、索引ページを設け、「奉仕」導入に当たっての課題への対応策について、各学校等が必要に応じて検索できるようにしたことである。また、奉仕体験活動について、都立高等学校の先進的な取組み内容、指導上の留意点や課題への対応策等を示した。

なお、本研究では奉仕体験・勤労体験活動のうち、奉仕体験活動を中心に扱うこととした。

索引 「奉仕」導入に当たっての学校の課題と対応策

学校の課題を「導入時の課題」と「各分野の活動に関する課題」に分けて示し、各学校で活用できるようにした。

【導入時の課題】

○教科・科目「奉仕」を学ぶ意義	p. 6
○教科・科目「奉仕」のとらえ方	p. 6
○教科・科目「奉仕」のねらい	p. 7
○「奉仕」の学習過程	p. 8
○学習計画の10のステップ	p. 9
○教科・科目「奉仕」導入の準備過程と留意点	p. 21
○奉仕体験活動の分野	p. 10

【各分野の活動に関する課題】

〈活動全体に関する課題〉

○活動の留意点	p. 20
---------	-------

〈活動先に関する課題〉

○活動先の開拓	
(文化、芸術又はスポーツ：小学生と文化活動)	p. 15
○施設の受入れ可能な人数	
(保健、医療または福祉：デイサービスセンター)	p. 12
(子どもの健全育成：子育て支援センター)	p. 19
○防災訓練への参加(災害救援活動)	p. 18

〈費用・予算・用具に関する課題〉

○講習会用のテキスト作成の費用の確保(教育の推進：パソコン講習会)	p. 13
○講師謝金の確保(まちづくりの推進)	p. 14

〈指導及び指導者に関する課題〉

○活動当日の指導者及び指導補助者の確保(環境保全活動：間伐)	p. 16
○事前学習や事後学習(災害救援活動)	p. 18

〈生徒の活動に関する課題、他〉

○活動時間の設定(教育の推進：パソコン講習会)	p. 13
(文化、芸術又はスポーツ：小学生と文化活動)	p. 15
○活動の継続(教育の推進：パソコン講習会)	p. 13
○生徒の安全確保(まちづくりの推進)	p. 14
○拾ったごみの分別や処理(環境保全活動：河川・公園の清掃)	p. 17
○生徒の活動意欲の喚起(環境保全活動：河川・公園の清掃)	p. 17
○活動内容の設定	
(文化、芸術又はスポーツ：小学生と文化活動)	p. 15

奉仕体験・勤労体験活動の指導に関する研究 【研究の概要】

現代高校生の課題
規範意識や自制心、組織や社会に対する帰属意識や公共心、自己肯定感の低下。対人関係能力などの不足。自立できない若者（NEET）の増加。
教育庁指導部「奉仕体験活動の必修化」（平成17年2月）より

東京都の施策
○「東京都教育ビジョン」（平成16年4月）取組の方向8「子どもたちの規範意識や公共心を確かなものとする」提言19「学校教育において、児童・生徒に対して、長期の社会奉仕体験や勤労体験等を義務付ける」
○東京都教育委員会の基本方針1の③「奉仕体験活動を通して、他人への共感、社会の一員としての自覚、社会に役立つ喜びなどを学ばせることをねらいとして、平成19年度から全都立高校において教科・科目「奉仕」を必修化することとし、平成17年度には、実践・研究校の指定やカリキュラム開発など、準備を進める。」

国の動向
○学校教育法及び社会教育法等のボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動にかかわる改正（平成13年7月）
○「学校教育及び社会教育における奉仕活動・体験活動の推進について（通知）」（平成14年3月、文部科学省）
○中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」（平成14年7月）

研究のねらい
生徒の規範意識や公共心の育成を確かなものとするために、東京都教育委員会が必修化を図る東京都設定教科・科目「奉仕」のカリキュラムを開発し、指導と評価の在り方を示すとともに、指導資料を作成する。

東京都設定教科・科目「奉仕」の目標及び内容（平成18年1月、教育庁指導部）

- **教科「奉仕」の目標**
奉仕に関する基礎的・基本的な知識を習得させ、活動の理念と意義を理解させるとともに、社会の求めに応じて活動し、社会の一員であること及び社会に役立つ喜びを体験的に学ぶことを通して、将来、社会に貢献できる資質を育成する。
- **科目「奉仕」の目標**
奉仕活動の理念と意義を理解させ、奉仕に関する基礎的な知識を習得させるとともに、社会貢献を適切に行う能力と態度を育てる。
- **科目「奉仕」の学習内容**

奉仕活動の意義	(ア) 奉仕活動の意義 (イ) 奉仕活動の分野 (ウ) 奉仕活動とボランティア活動
奉仕体験活動の内容項目の例	① 保健、医療又は福祉の増進を図る活動 ② 教育の推進を図る活動 ③ まちづくりの推進を図る活動 ④ 文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動 ⑤ 環境保全を図る活動 ⑥ 災害救済活動 ⑦ 地域安全活動 ⑧ 人権の擁護又は平和の推進を図る活動 ⑨ 子どもの健全育成を図る活動 ⑩ 様々な活動を行う団体等の運営又は活動に関する連絡、助言、援助

基礎研究

(1) 「奉仕」の学習を通して、育てたい生徒像の設定

※₁自分のよさに気づき、※₂よりよく生き、※₃よりよい社会をつくらうとする生徒

(注)
※₁ 自分が大切な存在であることに気づき、一人一人のよさを知る生徒 (自己有用感)
※₂ 他者を思いやる心を持ち、自らを律しつつ、夢や目標の実現を目指して成長しようとする生徒 (自己実現)
※₃ 社会の一員であることを自覚し、生涯にわたり、自分の意志で社会や地域に貢献しようとする生徒 (社会貢献)

(2) 奉仕活動の意義等の整理と実践事例の収集・整理

- ・文献や実践事例の分析により意義等を整理した。
- ・都立高校の先進的な取組みを取材し、実践事例を収集・分析した。

研究内容及び成果

(1) 「奉仕」の学習内容の明確化

① 「奉仕」の学習過程 (掲載 p. 8)

「活動の前に考えよう」 (掲載 pp. 6-7)

(ねらい) 奉仕活動の意義を知り、社会や人にとって大切な活動であることや多くの人々が積極的に取り組んでいる実態を理解し、奉仕活動への理解を深めること。
(内容) 「奉仕」を学ぶ意義、奉仕活動の歴史や社会での取組みなど。

「実際に活動してみよう」 (掲載 pp. 9-11)

(ねらい) 多様な奉仕活動を知り、自分の活動内容を考えて計画して、充実した活動を行うこと。
(内容) 都立高等学校の実践事例、体験活動の計画立案など実践に必要な知識や活動の内容・方法。

「活動をまとめよう」

(ねらい) 活動を振り返り、自己の在り方生き方について考察するなどして継続的に奉仕活動に取り組んでいこうとする意欲を高めること。
(内容) 活動の振り返り、活動のまとめと発表、自分の在り方生き方についての考察。

② ワークシート等の活用

- ・生徒の学習に沿って、ワークシートとして活用できるよう、書き込みのできる箇所を学習場面に設定する。

③ 実践事例の紹介 (掲載 pp. 12-19)

- ・都立高校による多様な取組み内容を紹介し、自ら活動内容を決定できるようにする。

(2) 指導資料の作成 (掲載 pp. 12-21)

- 指導上・実施上・組織上の留意点や配慮事項を明確にし、課題と対応策を分かりやすくまとめた。
- 授業の構想を立てる際の参考となるよう、授業開始までの準備の過程や留意点の要点を示した。

(3) 「奉仕」推進者養成研修の在り方 (掲載 p. 22)

「奉仕」の目標及び内容の理解を深め、実践事例等について学ぶとともに、年間指導計画・評価計画や学習指導案を作成することを通して、校内での指導計画作成や授業実践の中心となる教員を養成する必要がある。

《 今後の課題 》 (掲載 p. 22)

研究成果について、都の奉仕体験活動必修化実践・研究校等での活用を通して検証を行い、内容を充実・改善する。

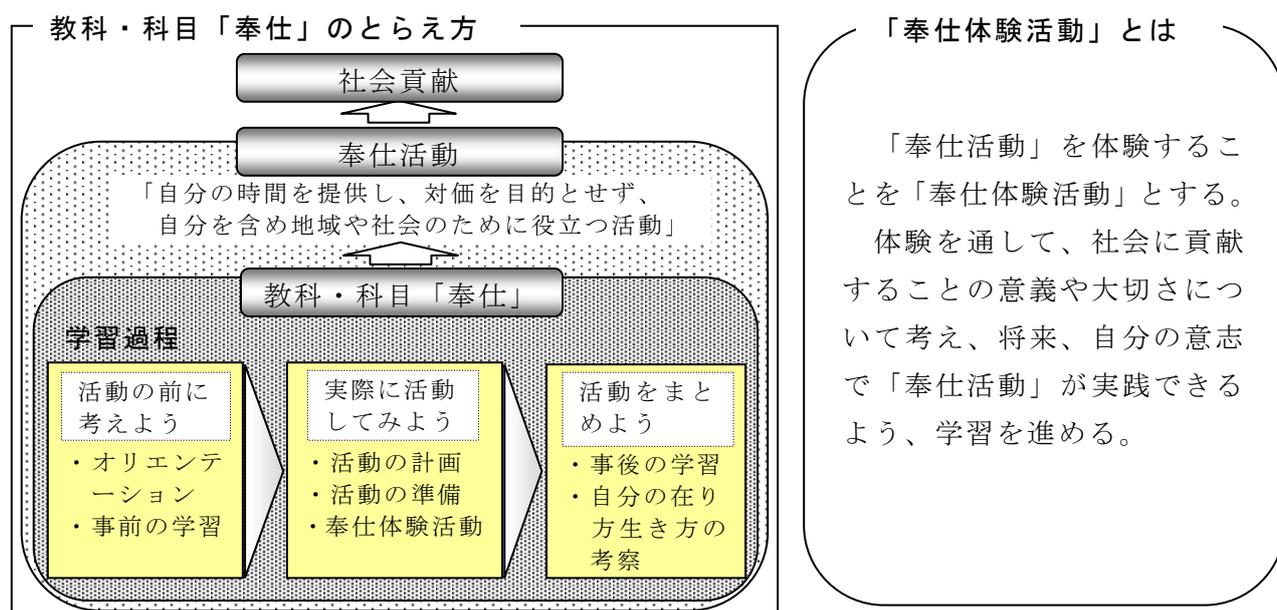
I 教科・科目「奉仕」を学ぶ意義

「奉仕」を学ぶ意義を以下のようにとらえた。

「奉仕」の学習について

「奉仕活動」という言葉の意味は、「何か人のために役立つ活動」、「社会のためにやらなければならない活動」、「ボランティア活動」など、人によって受け取り方は様々である。

「奉仕活動」については、「自分の時間を提供し、対価を目的とせず、自分を含め地域や社会のために役立つ活動」（中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」、平成14年7月）と、幅広くとらえ学習を進める。



奉仕体験活動を行う意義と育てたい生徒像について

実際に奉仕体験活動を行っている学校の生徒の感想に、「ありがとうと言われたことがうれしくて、その後の活動の活力になった。」、「だれかのために何かをしようと思うことで、自分も磨かれ、それが自分の幸せにつながった。」などがある。これらの感想からは、社会の一員として自分が大切な存在であることへの気付き、自己の成長につながったことへの自信、物事を広く深く考えることができるようになった喜びなどを感じ取ることができる。これが、奉仕体験活動の大きな意義である。

奉仕体験活動の意義を踏まえ、育てたい生徒像を次のように設定した。

自分のよさに気付き、よりよく生き、よりよい社会をつくらうとする生徒

- 「自分のよさに気付き」とは、自分が大切な存在であることに気付き、一人一人のよさを知る生徒。
- 「よりよく生き」とは、他者を思いやる心もち、自らを律しつつ、夢や目標の実現を目指して成長しようとする生徒。
- 「よりよい社会をつくらうとする」とは、社会の一員であることを自覚し、生涯にわたり、自分の意志で社会や地域に貢献しようとする生徒。

教科・科目「奉仕」のねらい

本研究では、教科・科目「奉仕」のねらいを次のようにとらえた。

〔人とのつながり〕

人との支え合いの中で自分が存在していること、助け合うことの大切さを知ること、感謝の心を持ち、感謝される喜びを感じることを。

〔達成感や自信〕

自分で決めた活動に対して責任をもってやり遂げること、自信をもって新たな活動へ挑戦すること。

〔思いやる心〕

他者を思いやる心を持ち、相手の立場に立った発言や行動をすること。

〔規範意識や公共心〕

社会のルールやマナーを守ること。

〔社会貢献〕

社会の一員として、社会に貢献することの意義や大切さを考え、自分の意志で社会のために役立つ活動に取り組もうとすること。

奉仕体験活動を行うに当たっては、事前学習において、生徒がこれまでの自分の経験を振り返るなどして、各自が奉仕活動を行う意義について考え、理解を深めたうえで実践することが大切である。

例えば、以下のようなワークシート「学習を深めよう」を用意し、学習の導入として様々な学習課題を準備し、ねらいを明確にして、生徒が学習に取り組めるようにする。

また、活動前の自分の思いなどを書き込むことで、事後学習での活動の振り返りで、自分の気持ちの変容を確認し、活動後の学習を深めるようにする。

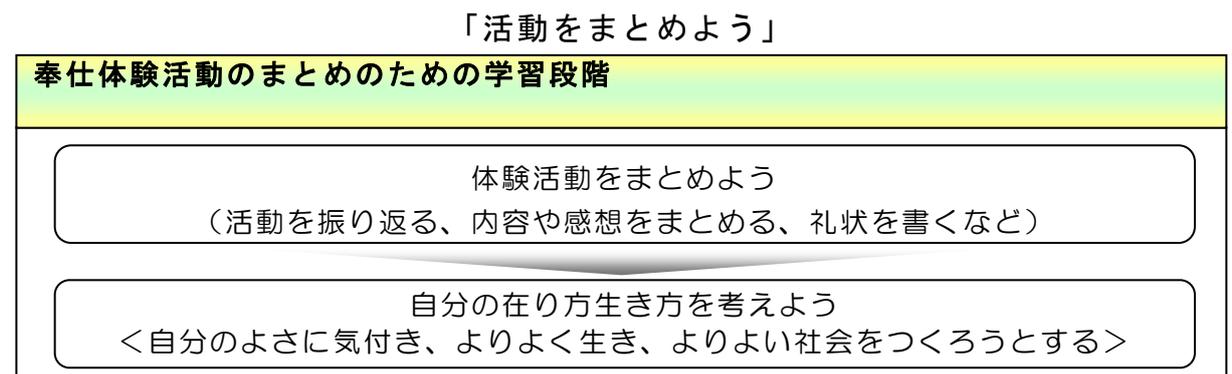
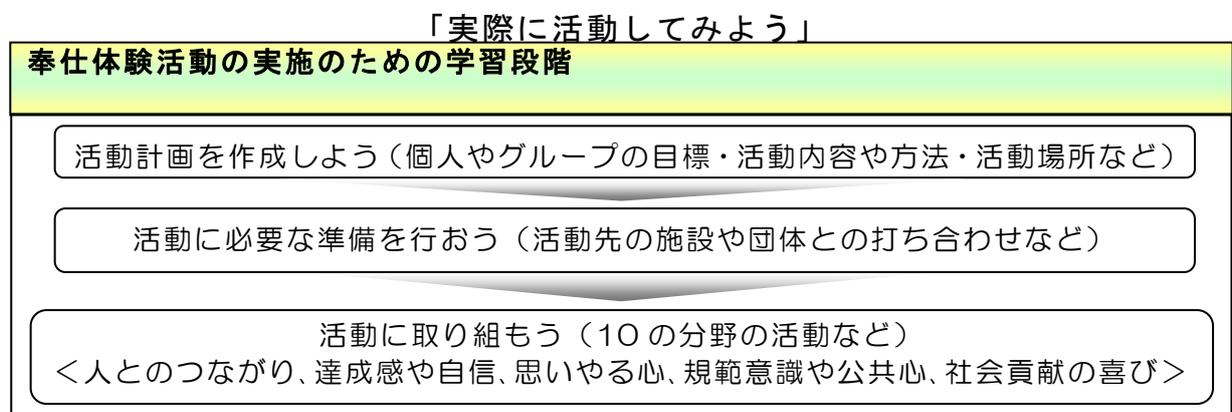
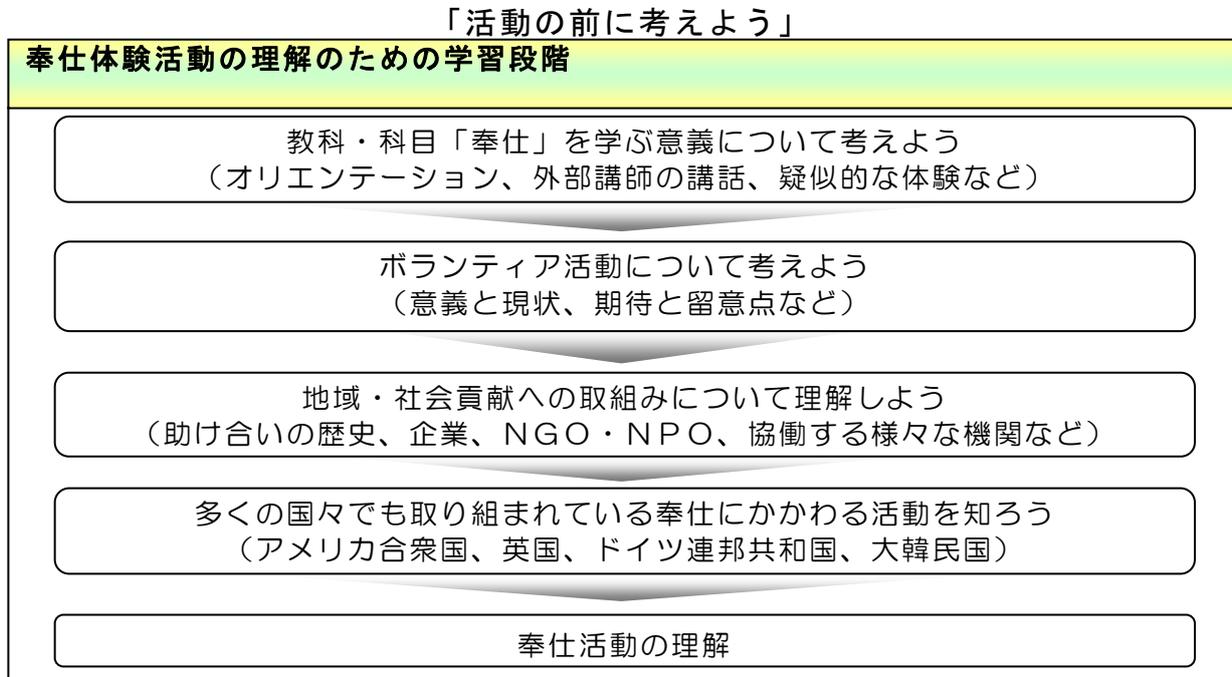
学習を深めよう

- 1 自分自身や周りの人が行った奉仕活動で、印象に残った活動は何ですか。
〔 〕
- 2 それは、どのような理由からでしょうか。
〔 〕
- 3 高校生が奉仕体験活動をすることについて、どのようなことが期待されているのでしょうか。
〔 〕
- 4 奉仕体験活動で、これからどのようなことを学びたいと思いますか。
〔 〕

Ⅱ 「奉仕」の学習の構成

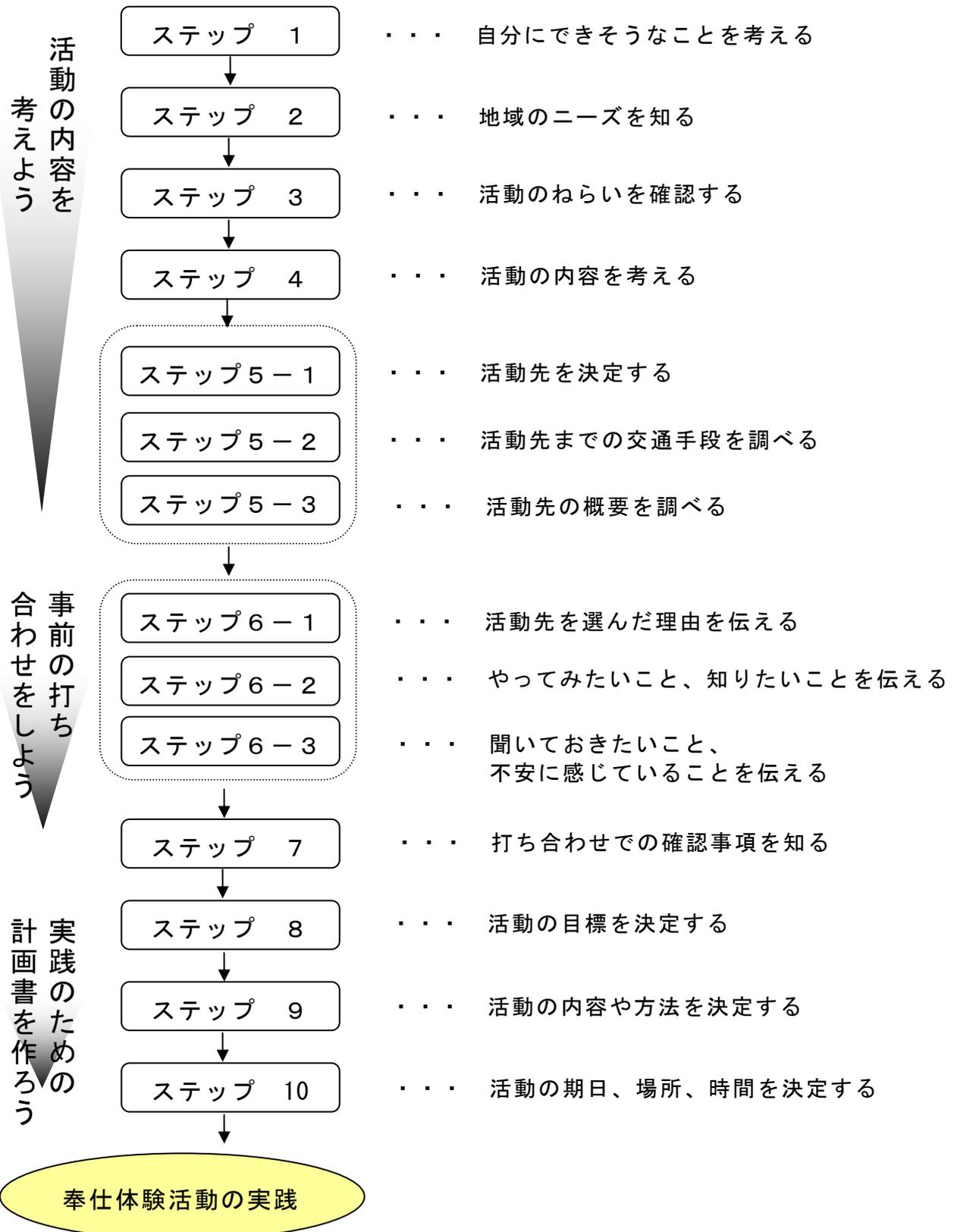
1 「奉仕」の学習過程

生徒が主体的に活動し、「奉仕」の意義に気付くよう、学習過程を以下のように設定した。



2 学習計画の10のステップ

奉仕体験活動を円滑に進めるためには、事前の打ち合わせや計画づくりを確実に行わせることが重要である。そこで、「実際に活動してみよう」（奉仕体験活動の実施のための学習段階）を次のような10のステップとして設定した。



Ⅲ 奉仕体験活動の内容

1 奉仕体験活動の分野

本研究では、奉仕体験活動を体験だけで終わらせないために、活動の意義や活動の留意点を明確に示し、取り組む活動を生徒が自分で決定できるようにすることが重要であると考えた。

そこで、特定非営利活動促進法を基に、奉仕体験活動の分野を次の10分野とした。そして、それぞれの分野ごとに、都立高等学校での取組みの事例を示すとともに、活動の意義や留意点を示し、生徒が活動を選択したり、計画を立てたりする際の参考となるようにした。

◆ 奉仕体験活動の実践に向けて ◆

教科・科目「奉仕」の目標を受けて、まず、自分が何をねらいとして活動するかを考えることが、必要である。また、奉仕体験活動を実践するには、事前の準備が大切である。事前の準備には、多岐にわたる奉仕活動の中から実際に体験する活動の内容や場所を考え決定すること、活動先となる施設や団体等と活動の目的、内容、方法等についての打合せをすること、実践のための計画書を作ることなどがある。ステップを踏みながら、自分の活動計画づくりを進める必要がある。

多様な奉仕体験活動

奉仕活動は、多岐にわたる分野の活動がある。そうした中で、高校生が体験できる奉仕体験活動には、どのような活動があるかを知らせる必要がある。また、実際に活動するためには、どのような準備をしなければならないかを確かめることも必要である。下の①～⑩の10分野の活動例を示し、自分でできそうなこと、地域で取り組むことが可能なことを条件に、何ができるかを考えさせることとした。

① 保健、医療又は福祉の推進を図る活動

- ・車いすの修理やメンテナンスを行う。
- ・デイサービスセンター、特別養護老人ホーム等において利用者の話し相手、外出介助、レクリエーション活動、洗濯物の整理、リネン交換、花壇整備などを行う。

② 教育の推進を図る活動

- ・学校周辺に住んでいる人々を対象としたパソコン講習会を開く。
- ・図書館で、子どもたちへの絵本の読み聞かせや視覚障害者への対面朗読などを行う。

③ まちづくりの推進を図る活動

- ・地域の商工会や町内会、商店街連合会などと協力して市民まつりなどに参加し、模擬店出店の手伝いやイベントの企画・運営、ちらしの作成などを行う。
- ・地域の人々と交流しながら、学校周辺を花で飾る「花いっぱい運動」や町の清掃活動を行う。

④ 文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動

- ・地域の小・中学生などに、囲碁・将棋、百人一首、お手玉、折り紙、郷土芸能などの日本の伝統・文化や合唱、器楽演奏、書道、絵画などの芸術を教える。
- ・小・中学生へのスポーツ指導を行う。

⑤ 環境保全を図る活動

- ・山林の間伐や下草刈りなどを行う。
- ・海辺や河川流域などの清掃・美化キャンペーンに参加する。
- ・公園ボランティアとして花壇の花の手入れ、ごみ、落ち葉などの清掃や草取りなどを行う。

⑥ 災害救援活動

- ・被災地の復旧・清掃作業、食事の炊き出し、援助物資の仕分けや配送、避難生活のサポートなどの救援活動に備えた訓練を行う。
- ・被災地への募金活動を実施したり、被災者を励ます手紙を書いて送ったりする。
- ・消防署の災害支援ボランティア活動や地域の消防団活動の運営を手伝う。

⑦ 地域安全活動

- ・専門学科の特色を生かし、交通安全講習会で、キットカーの走行を小学生などに見せ、交通安全について啓発する。
- ・地域住民等の組織（町内会や自治会、PTA等）が主体となって進めている通学路の安全点検や巡回パトロール、危険箇所マップづくり、落書き消し等に参加する。

⑧ 人権の擁護又は平和の推進を図る活動

- ・紛争や戦争、貧困、差別などによって、経済的に深刻な問題を抱えている人たちなどへの援助活動を行う。
- ・「日本語教室」などで在日外国人の日本語学習を支援する。
- ・平和の推進のための国際交流活動を行う。

⑨ 子どもの健全育成を図る活動

- ・子育て支援センター、保育所、児童養護施設、児童館、学童クラブなどで職員のサポートやイベントの手伝い、遊びの指導などを行う。
- ・キャンプや自然教室の企画、付き添い、野外活動や遊びの指導などを行う。

⑩ 様々な活動を行う団体等の運営又は活動に関する連絡、助言、援助団体への情報提供、相互調整、活動にかかわる安全管理など

- ・校内に委員会を設置し、生徒の代表として、体験活動を円滑に進めるための連絡や調整等を行う。
- ・NPOなどの設立に向けた取組みを行う。

次ページから 19 ページまでは、これまでの都立高等学校での取組みの事例を活動分野ごとに示す。

2 奉仕体験活動の実践例

保健、医療又は福祉の増進を図る活動

具体例 「デイサービスセンターの高齢者との交流」

高校生がデイサービスセンターの利用者と、手芸や工作などの趣味やレクリエーション活動に参加し交流する。また、食事やリハビリテーション、トイレ介助などの補助や清掃をはじめとする環境整備を行ったり、職員の助言を受けたりして交流行事を計画し、実行する。

【活動の意義】

- 交流を通して、高齢者と自分たちがつながっていることを知る。
高齢者の生活を知り、一人一人と触れ合うことで、高齢者を自分と同じ町に住む身近な「人生の先輩」ととらえ、自分とかかわりがあることに気付く。
- 相手を思いやる心を学ぶ。
自分から積極的にかかわることや、相手を尊重する言動により、高齢者の心を和ませることができると実感し、やさしさとは何か、思いやりとは何かを考える。
- 人間の老いについて考え、保護者や自分の将来について考える。
保護者の老いや自分の人生を考え、これまでの自分自身を振り返るとともに、これからの自分の在り方生き方を考える。
- 高齢者をはじめとする様々な人々が心地よく暮らせる町の在り方を考える。
体験を基に、高齢者をはじめとする一人一人が大切にされる地域社会の在り方を考える。また、そこに暮らす自分ができることを考える。

【活動の留意点】

生徒に、活動先の概要や利用者についてあらかじめ学習させることが大切である。見通しをもった活動が、主体的な活動につながる。相手を思いやる気持ちを持ち、不快にさせない服装や言葉遣いに留意させる。また、爪を短く切り、装飾品をはずすなど、自分や相手の安全に配慮させることが必要である。

利用者に対して、乳児に接するような言葉遣いやお世話をするという姿勢は不適切である。触れ合いを大切に、一人一人の利用者を尊重して接するように理解させることが大切である。

事前指導	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者について具体的なイメージがわくように、事前訪問や事前学習の際、講話やビデオ教材などを活用し様々な面から高齢者の特徴を理解できるように工夫する。 ・自分の役割意識や目的意識を高めるために、生徒自らが企画できるようにする。事前訪問の機会に、受入れ先のニーズを把握し、高校生や利用者、受入れ先も成果の得られる企画を考える。生徒が演奏等を発表するだけでなく、一緒にレクリエーションをする、利用者の活動を支援するなど様々な形態が考えられる。生徒の発想を生かすことが重要である。
活動中	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者ができることまで手助けしてしまうのは、相手にとってマイナスである。それぞれのもつ力の見極めなどが重要で、施設職員に話を聞きながら利用者一人一人にあった適切な行動をするよう指導する。
事後指導	<ul style="list-style-type: none"> ・個人情報、絶対に他人に話さないように十分注意させる。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・感冒等の感染がないよう実施時期に配慮し、生徒の体調管理を徹底する。生徒の体調が十分でない場合は、休ませて代替措置を講ずる。また事前に細菌検査を実施しておく。

【課題と対応策】

- 施設の受入れ可能人数

4～5名程度が目安である。教員の引率がある場合など10名程度も可能な場合もある。

教育の推進を図る活動

具体例 「高校生によるパソコン講習会」

高校生が、学校周辺に住んでいる高齢者を中心とした初心者を対象とするパソコン講習会を開く。授業で習ったワープロ、表計算、プレゼンテーションのソフトウェア、インターネットなどに関する知識や技術を受講者に教える。パソコン講習会后、受講者の求めに応じて、サポートを継続するなど活動を広げていくことも考えられる。

【活動の意義】

- 他者理解を深め、自己有用感をはぐくむ。
地域の人々との交流を通して、他者理解を深めるとともに、自己有用感をはぐくむ。
- 主体的な学びをはぐくむ。
人に教えることを通して、自ら学ぶことの大切さを学ぶ。
- 企画力、実行力、責任感を育成する。
活動プログラムを考えたり、会を運営したりするために必要な企画力、実行力、責任感などを身に付ける。

【活動の留意点】

ワープロ、表計算、プレゼンテーションのソフトウェア、インターネットなどパソコンの基本操作を生徒に習得させることが必要である。パソコン初心者が多い高齢者等の気持ちをよく理解して接することが大切である。また、ていねいな言葉遣いと分かりやすい説明も大切である。

事前指導	<ul style="list-style-type: none"> ・ ITに関する知識や能力をしっかり身に付けさせる。 ・ スケジュール管理を確実に行う。 企画：3か月前までに ポスターの掲示：1か月前までに 講習会用テキストの作成：1週間前までに 講習会用テキストの熟読と事前の動作確認等：講習会当日までに
活動中	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高校生らしい服装、ていねいな言葉遣いなどを生徒に指導しておく。 ・ 初心者の気持ちを考えて、楽しく習得してもらうことを心がけるように指導する。
事後指導	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分たちの活動が参加者の要望を満たしていたかどうかを、振り返らせる。
その他	講習会の日程の例 1日目：基本操作 2日目：ワープロ 3日目：プレゼンテーション 4日目：インターネット 5日目：総合復習

【課題と対応策】

- 必要な予算の確保
活動を継続していくためには、講習用テキストを作成する費用の問題がある。学校内で予算が確保できない場合には、受講生からテキスト代を徴収することも考えられる。
- 講習時間の設定
受講者のニーズにあった講習時間は、平日の昼間のみならず、夜間や休日も考えられる。
- 活動の継続
生徒の活動を毎年継続するために、例えば、1年生は受付や印刷、資料作成などの仕事と講習会での事務的な仕事、2年生は講師の補助、3年生になると講習会の責任者となり、同時に下級生の指導を重点的に行うなどといった役割分担の工夫が考えられる。

まちづくりの推進を図る活動

具体例 「地域の行事に参加するなど地域の活性化につながる活動」

「活気のある商店街づくり」や「住民同士の交流を図ること」を目的として実施されている市民まつりなどの地域行事へ参加する。具体的には、地元の商工会や町会、商店街連合会などと連携・協力し、模擬店出店の手伝いや、行事の企画・運営をスムーズに行うための手伝い、ちらしや商店街ホームページなどの企画・作成を行う。

【活動の意義】

- 社会の一員としての自己の在り方について学ぶ。
地域の人々と協力し、助け合って企画・運営していく活動を通して、人と人とのかかわりの中で自己が存在していることに気付き、社会の一員としての発言や行動の在り方について考える。
- 将来の自分の生き方について学ぶ。
多くの人々とかかわる活動から、様々な考え方や生き方を知り、将来の自分の生き方について考える。
- 将来にわたって社会に貢献することについて学ぶ。
人々と協力し、助け合っていく一連の活動を通して、社会の一員であることを実感し、将来にわたって社会に貢献しようとする態度を身に付ける。

【活動の留意点】

生徒を地域の活性化につながる活動に参加させるに当たっては、その活動で求められているニーズを的確に把握させたいうで参加させることが大切である。事前の学習において、生徒と受入先が事前に話し合う場を設定するなどの工夫が考えられる。また、事後の学習においては、生徒自身が活動を評価し、新たな活動を考える学習場面を設定するなど、次の活動に結び付ける学習の工夫が大切である。

事前指導	・事前の学習では、実際に商店街の方を招いて講演会を実施するなど、生徒の興味を引き付け、目的をもって活動に取り組めるような指導の工夫が必要である。
活動中	・活動場所が学校から離れている場合、交通費が自己負担となることが考えられる。保護者への連絡を徹底し、理解を得る。 ・地域の商店会と連携した活動に限らず、人と人とのかかわりのある活動では、あいさつや礼儀作法は最も基本的な内容となる。学校の教育活動全体の中で日常的に指導を徹底する。
事後指導	・学習の成果を発表する機会を設ける。発表の準備を行う過程で、生徒の問題発見能力を高めたり、その後の主体的な活動につなげたりするよう配慮する。また、発表を通じて、表現力やコミュニケーション能力が高められるよう配慮する。

【課題と対応策】

- 生徒の安全確保
生徒が活動する施設・団体等と十分な話し合いを行い、生徒が安全に活動できる時間帯を設定する。また、安全指導上想定できる問題に対して素早く対応できる体制を整えておく。場合によっては保護者に協力を求めることも考えられる。
- 講師謝金の確保
商店街の活性化などにかかわる活動であれば、地元にある商店街振興組合連合会と連携して講師を依頼することで、国などの補助金を受けられる場合もある。

文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動**具体例 「小学生と一緒に文化、芸術活動」**

小学校で子どもたちに、囲碁・将棋、百人一首、お手玉、折り紙、郷土芸能などの日本の伝統・文化や合唱、器楽演奏、書道、絵画などの芸術を教える活動である。高校生が地域のボランティアと協力して、小学生に合った内容を考える。高校生は、年齢が近く、子どもたちにとっても身近な存在であるので、子どもたちと気軽に話をしながら教えることができる。

【活動の意義】

- 人と人とのつながりを感じる。

文化、芸術又はスポーツに関する活動は、幅広い年齢層の人々が一緒に楽しむことができる。自分の好きな活動を通して、日ごろあまりかかわりのなかった地域の小学生やボランティアと交流し、人とつながりを感じるができる。

- 伝統・文化の継承者として活動するきっかけになる。

小学生と一緒に文化、芸術活動をする場合、高校生は単に活動を楽しむだけでなく、その活動の基本的な技術を指導することが求められる。言い換えれば、この活動は、自分自身が文化、芸術への理解を深めたり、技能を高めたりすることにもつながるといえる。そして、人を指導することの難しさや喜びも感じる事ができるはずである。

また、地域の伝統・文化を継承する働きを果たすことで、社会の一員としての自覚を高めることができる。

【活動の留意点】

自分が興味・関心のある活動内容を選ばせることが大切である。そして、地域の小学生やボランティアと積極的に交流し、常に楽しむ気持ちを忘れないようにする。ただし、安全面に対する配慮を欠かしてはいけない。また、地域の小学生、ボランティアの思いや考え方をすることによって、その地域、学校ならではの活動を創り出すことができる。

事前指導	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に活動内容等を紹介し、生徒が自分の興味・関心のある活動内容を選択できるように希望調査を行う。 ・生徒と指導にあっているボランティアとの打合せの機会をもつ。打合せで確認する内容は、活動内容、活動方法、活動場所、持ち物、配慮事項等である。 ・小学生が使用している教科書等を提示したり、自分自身の振り返りをさせたりすること等によって、小学生の各学年の発達段階の特徴を理解させる。
活動中	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアや小学生との交流を深めるために、自分から積極的に声をかけることが大切であることに気付かせる。 ・伝統・文化や芸術の振興を図るためには、小学生と一緒に、常に活動を楽しむ気持ちを持ち、活動の継続を図ることが大切であることを徹底する。 ・活動の基礎的・基本的な技術についてよく理解し、小学生への実際の指導に当たるようにさせる。
事後指導	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統・文化の継承者として、高校生自身が活動を継続することの大切さを理解させる。

【課題と対応策】

- 活動先の開拓

地域のボランティアセンターや区市町村教育委員会の生涯学習担当課または近隣の小学校等に、活動にかかわっている団体等の連絡先を問い合わせ、活動内容等を確認した上で活動の依頼を行う。

- 活動時間の設定

小学校の活動日や時間に合わせ、授業時間内や放課後に設定する。

- 活動内容の設定

生徒が行う活動については、指導にあっている地域のボランティアと事前に協議した上で決定する。

環境保全を図る活動

具体例 1 「山林で間伐体験」

学校近くの山林で、間伐体験を行う。間伐体験では、ヘルメットをかぶり手袋を着用し、腰には鉋を下げ、山林に入り、間伐の方法を実際に学んだあとに作業を開始する。十数メートルの高さの杉や檜を、のこぎりや鉋を使って切り、ロープをかけて倒す。

間伐によって、森林内を明るくし、下層植物を回復させ、土壌の流出を防ぎ、豊かな森林土壌が作られる。そして、森林が水をたくわえたり良質な水を生み出したりすることにつながる。

【活動の意義】

- 環境保全に貢献する。
間伐の意義・森林の機能や現状を学ぶとともに、将来にわたって環境の保全に貢献しようとする態度を育てる。
- 人とのつながりから学ぶ。
地域の指導者との交流を通して、様々な考え方や生き方を知り、自分自身の生き方について考える。また、仲間と協力して木を切ったり、ロープをかけて1本ずつ木を倒したりしていくことにより、協力してものごとを成し遂げることの大切さを学ぶ。
- 自然の素晴らしさを実感する。
普段の学校生活ではあまり立ち入ることのできない自然の中での奉仕体験活動ができる。実際に木が倒れる音を聞いたり、倒れた木の切り口の香りを感じたり、また、作業が進むにつれ森の中が明るくなることを体感したりすることにより、自然の素晴らしさを実感できる。

【活動の留意点】

間伐をはじめ、下刈り・枝打ち・植栽などの森林保全活動では、直接森林に入って作業するため、夏の暑い時期でも安全のために長袖の服を着用させる必要がある。ある程度の体力も必要である。また、作業の手順、用具の使い方や具体的な間伐の手順についても事前にしておく必要がある。

事前指導	・森林の役割や現状、間伐・下草刈りなどの重要性、森林ボランティア団体などの活動の実態などを学ぶことにより、環境に対する問題意識をもたせる。
活動中	・十数メートルの高さの木を何本も切り倒していくこともあるので、安全面の注意が特に必要である。活動の時間が長時間になり集中力を欠いたり、ふざけて事故につながったりしないよう細心の注意を払うよう指導する。
事後指導	・間伐や下草刈りを単なる体験でなく、社会貢献としての意義を理解させる機会や、広く環境問題についての意識をもたせる場とすることが大切である。また、間伐材の利用について調べたり、実際に間伐材を家庭や学校、地域などで活用したりする活動を工夫することも考えられる。
その他	・間伐は通常冬季に行われることが多い。春・夏には下草刈りなどの活動を併せて行うことで、継続的な活動が可能となる。

【課題と対応策】

- 活動当日の指導者及び指導補助者の確保
林業従事者も普段は林業以外の勤務をしている場合が多いので、地域の森林ボランティア団体と相談しながら計画する。

具体例2 「河川や公園の清掃」

地域を流れる河川の周辺や、地域にある公園などの清掃を行う。河川の清掃ではごみを拾うことが主な活動になるが、拾ったごみの内容や量を調べ、どうすればごみをなくすことができるかなどを考える取組みもある。

また、公園では園内の清掃以外にも、樹木や花壇の手入れ、施設や遊具の整備などが考えられる。

【活動の意義】

- 環境美化の意識を高める。
ごみを一つ一つ拾うことで、環境美化に対する意識やごみを捨てないなどの公共心が高められる。
- 地域の一員として、社会とかかわる方法を考える。
公園を訪れる地域の人たちに安全に気持ちよく利用してもらうことができ、地域の一員として自分が社会に対してできることを具体的に考える機会とすることができる。

【活動の留意点】

この活動ではごみを拾うことが中心になるが、活動範囲が広がるため、ごみの拾い方、危険物の扱いや、周辺をジョギングや自転車で走る人などに対する注意、立ち入ってはいけない危険な場所などについて事前の確認が必要である。また、環境美化活動は一度に多くの生徒の活動が可能なのが特徴であるが、学校が単独で活動するよりも、地域や自治体と連携することによって、社会貢献の意識がより高められる。また、ごみを捨てない、捨てさせないための活動などにつなげることも考えられる。

事前指導	・活動をしようとする場所の実態を知ることや、環境美化活動を実際に行っている人の話を聞くことにより、環境美化に対する意識を高めることが考えられる。活動直前には、ごみの収集・分別の方法や危険な場所、交通安全、緊急時の連絡方法やトイレなどの対応も確認する。捨てられている危険物等の扱いや対応、路上生活者等とトラブルが起きないように注意を払う。
活動中	・活動が広範囲になることも予想されるので、巡回指導等を行う場合は計画的に行う。地域の自治体と連携し、拾ったごみの回収・処理までできるとよい。
事後指導	・生徒がごみをただ拾っただけの活動で終わってしまわないよう、まとめや振り返りを行い今後の活動の意欲につなげることが大切である。また、活動を発展させ、ごみを捨てないようにするための活動等につなげることも考えられる。
その他	・学校単独ではなく、地域や自治体と連携して活動を計画・実施することも考えられる。

【課題と対応策】

- 拾ったごみの分別や処理
分別や処理の方法は地域によって様々で、粗大ごみの処理に費用がかかる場合もある。事前に関係の自治体等との確認が必要である。
- 生徒の活動意欲の喚起
事前に環境保全活動に関する講話等を行い、生徒の意識を高める。また、地域の人々と一緒に環境保全について話し合いながら活動を進めることにより、生徒にやりがいを感じさせ、意欲をもって活動に参加できるよう工夫する。

災害救援活動

具体例 「災害時における救援活動に備える」

火災、地震、その他非常事態発生時を想定した広域避難所での避難訓練等に参加し、小・中学生等の避難誘導訓練を行う。また、地域と連携し、様々な訓練（食事の炊き出しや配食、災害時要援護者の搬送、消火器による初期消火、応急救護等）や煙ハウス、起震車体験の実施の補助を行うことで、防災意識を高め、応急対応力の向上を図る。

【活動の意義】

- 人とのつながりの中で、助け合うことの大切さを知る。
災害救援に関する知識と技術を身に付けることは、大きな災害が起こったときに、災害時支援ボランティアとして活動できる力を育てることにもつながる。また、地域住民の一人として、地域の防災力を高めることにも貢献できる。
- 災害救援時に、地域の担い手として期待されていることを実感する。
東京消防庁をはじめ各地域の消防署等では、災害救援に関する知識と技術が取得できる講習会等を開いている。また、災害支援ボランティアの募集も行っている。高校生も地域の担い手として期待されている。

【活動の留意点】

大きな災害が起こったとき、多くの人は、「何か救援活動に参加したい」と思う。しかし、個人の思いだけで行動することは、被災地の人々や他のボランティアの迷惑になる場合もある。緊急度が高く、被災者が本当に必要としている活動をすることが最優先であり、できれば区市町村の各機関や災害救援活動を取りまとめる組織のもとで行動することが望ましい。

ボランティアにできることはたくさんある。新聞やテレビ、インターネット等で、現地の災害救援ボランティアセンターの設置について確認し、学校を通して、事前に活動内容や参加方法、留意点等を調べてみる。また、被災地で活動する際は、宿泊場所は自分自身で手配し、水や食糧等も持参することなども必要になる。

事前指導	<ul style="list-style-type: none"> ・災害発生時における危険箇所等を把握し、適切な行動の在り方について理解させる。 ・生徒に実施要項を配布し、訓練当日の動きについて見通しをもてるようにする。
活動中	<ul style="list-style-type: none"> ・災害に備え、積極的な態度で訓練に臨ませるようにするとともに、災害救援に関する知識と技術を身に付けさせる。
事後指導	<ul style="list-style-type: none"> ・災害救援時は、高校生も地域の担い手として期待されていることを理解させる。 ・大きな災害が起こったときに、災害支援ボランティアとして活動する場合の注意事項等を理解させる。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・訓練への参加にあたって、関係者や地域住民と協力し、適切な態度で活動することを心がけさせる。

【課題と対応策】

- 防災訓練への参加
参加方法等については、学校と関係機関（区市町村の防災担当課）との事前の相談が必要である。
- 事前学習や事後学習
東京都教育委員会が作成した「地震と安全」（高等学校）を活用した学習が考えられる。また、消防署や警察署等の関連機関の職員、災害支援ボランティア等の講演を聞くこと等も考えられる。

子どもの健全育成を図る活動

— 具体例 「子育て支援センターで子どもと触れ合う」 —

センターを訪れる親子や子どもたちを笑顔で迎え、子どもの発達段階や希望に応じた遊び、保護者との交流などを行う。絵本の読み聞かせ、ボール遊び、将棋、卓球など様々な活動がある。乳幼児の場合は、保護者や施設職員の協力を得て、子どもを抱いたり、手遊び・歌遊び、製作などの遊びをしたりすることもある。

【活動の意義】

- 人と人のつながりの大切さを学ぶ。

自分から子どもにかかわることによって生まれる温かな交流を通して、かかわることの心地よさを感じ、人と人がつながることの大切さを学ぶ。交流を通して、子どもとその保護者の存在を知り、周りの人や自分を育ててくれた保護者の存在や大切さに気付く。

- 子どもに合わせて行動する大切さを学ぶ。

子どもと心の交流をするには、子どもの発達段階や個性に合わせて適切な言動をする必要がある。事前指導などで子どもの発達段階について知り、子どもたちとの交流を通して、相手を思いやる大切さを学ぶ。

- 家庭の役割や育児への理解のきっかけとする。

乳幼児やその保護者との触れ合いから、児童虐待の防止への取組みや子育ての意義や喜びを知り、家庭の役割や育児についての理解の第一歩とする。

【活動の留意点】

高校生が、活動先での自分の役割を把握し、活動への見通しをもつことは、体験活動を主体的に進めていく大切な要素である。事前訪問などの機会に、発達段階に応じた子どもたちの特徴などを学び、好きな遊びなどについて、施設の職員からヒントをもらえるようにする。

児童虐待は、だれにでも起こりうることを施設の職員や保護者の話を聞くなどして知り、様々な支援機関の存在も理解させる。子育ては、意義があり喜びも感じる事ができるかけがえのないものであることを実感させる。

事前指導	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の役割を意識させ、目的意識を高めさせるために、生徒自らが活動を企画できるようにする。生徒の実態や受入れ先の状況に応じ、子どもたちが一緒に楽しめるものを考えるきっかけを与える。 ・子どもの発達段階により、理解力や運動能力などが異なることを事前の訪問や学習の機会に理解させる。ビデオ教材や幼児対象のテレビを視聴することで、様々な面から理解をさせるなど工夫が必要である。
活動中	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの安全だけでなく、生徒や活動にかかわる人の安全に留意するよう、重ねて生徒に伝えておく。
事後指導	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言動により相手との人間関係を損なう場合もあることを知り、自分の言動の重さを実感し、社会の一員としての責任を自覚させる。また、子どもとの交流体験から、誰もが暮らしやすい町の在り方を考えるきっかけとする。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・感冒等の感染がないように実施時期に配慮し、生徒の体調管理を徹底する。生徒の体調が十分ではない場合は、休ませて代替措置を講ずる。また、事前に細菌検査を実施する。 ・その他の活動としては、保育園、幼稚園、学童保育所、子育てサークル、土曜日などに実施されているホリデースクール、放課後に実施されるスクールなどがある。

【課題と対応策】

- 施設の受入れ可能人数

4～5名程度が目安である。教員の引率がある場合など10名程度も可能な場合もある。

3 活動の留意点

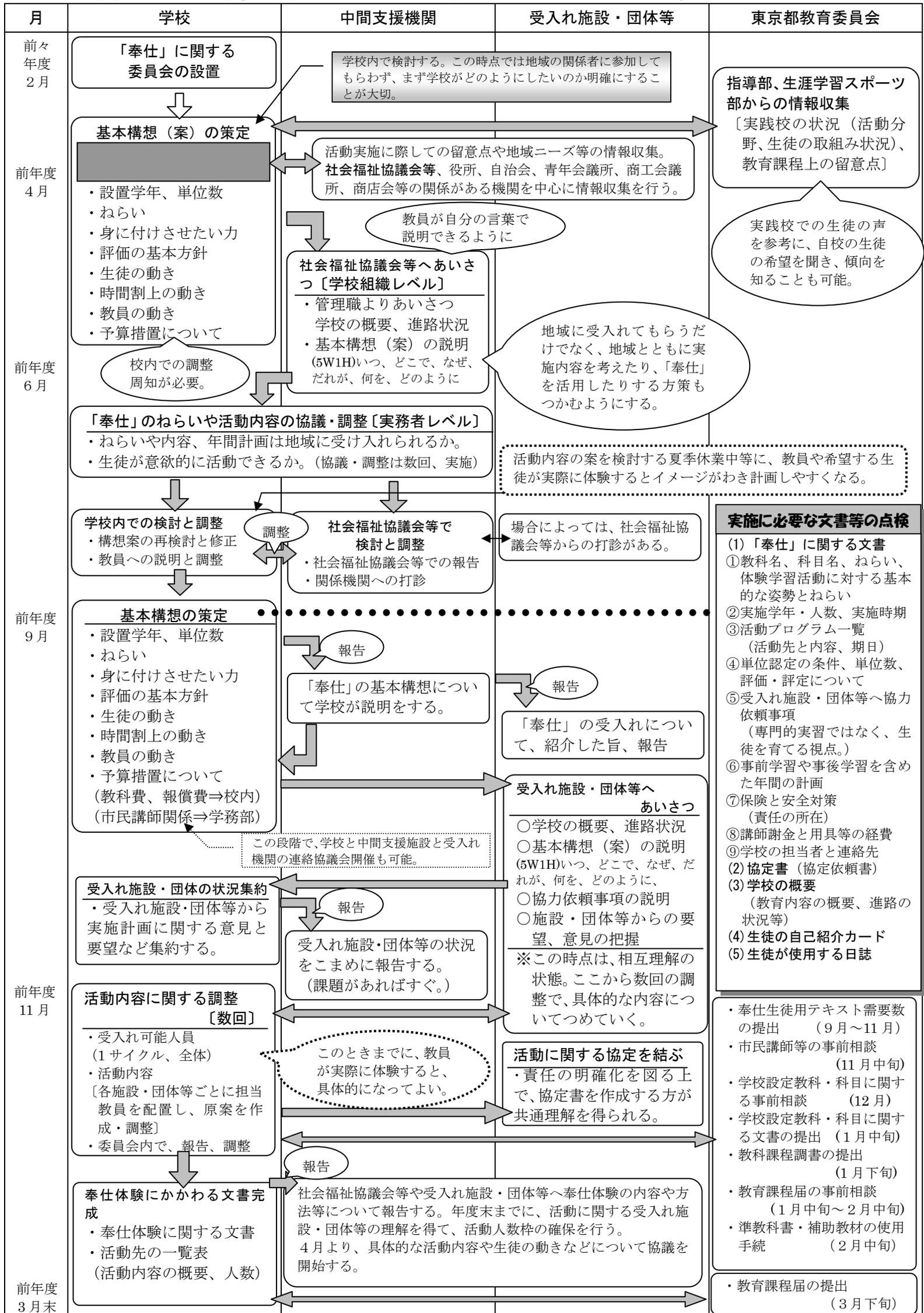
様々な奉仕体験活動を実施するにあたり、各活動内容に関連する留意点は、それぞれの実践例のページで述べたが、ここでは共通する留意点をまとめて示す。

	生徒に対する指導上の留意点	奉仕体験活動実施上の留意点
事前指導（活動前）	<p><学習のねらい> この科目を学ぶ理由や内容などの基本的事項を生徒に理解させる。「体験を通して、人とのつながりを感じ、達成感や自信を体得させ、他者を思いやる心をもつ。そこから、自らルールやマナーを守る必要性を認識する。また、自らの意志で社会に貢献する大切さを知る。」という流れを基本とする。奉仕体験活動により将来も主体的に社会にかかわれるよう活動の進め方に配慮する。活動を通して、自然に公共心や規範意識が高まるようにする。</p> <p><教材の工夫> テキスト以外に、受入れ施設・団体等の職員の講話や上級生の話、ビデオ教材（*1）、パソコンの活用などの工夫をし、学習の理解を深める。</p> <p><具体的な目標設定> 一人一人に具体的な目標を設定させることが重要である。目標を達成するための具体的な行動についても見通しをもたせることが、充実した奉仕体験活動への重要な要素となる。</p> <p><生徒の自発性を尊重> 生徒が課題意識をもち、独自のプログラムを考えた場合は、題材や活動が目標に適しているか複数の教員で判断し、できる限り尊重し支援する。また、スケジュール管理にも気を配る。活動までに行うことを整理させ、各段階で教員が確認する必要がある。</p>	<p><共通理解> 学習のねらいについて、学校と受入れ施設・団体等が共通理解をする。文書のみでなく、担当者を訪ね、協議を行う。特に、担当の教員が何を学ばせたいのかを明確に示すことが大切である。両者の共通理解ができると、奉仕体験活動の学習プログラムが生徒の実態に合致し、受入れ施設・団体等から生徒への助言等がより効果的になる。また、この共通理解により、的確な振り返りができる。</p> <p><役割分担> 道具や活用に必要なものなど、学校と受入れ施設・団体等で役割分担を明確にする。</p> <p><安全面の確認> 活動に伴う危険や危険を回避するための行動などについて、受入れ施設・団体等から情報を提供してもらう。教員も生徒の安全について意識を高める。</p> <p><事前訪問、事前講話> 活動の効果を上げるため、事前訪問や学校での講話などの学習時間を設定する。</p>
活動中	<p><巡回指導時> 様々な面で戸惑う生徒を温かく見守る姿勢で巡回指導する。生徒のよい点を具体的にほめ、不安な点を聞き適切な助言を行い、安心感をもたせるようにする。</p> <p><引率時・同行時> 主役は生徒であることを忘れずに、生徒に自ら考えさせ、行動させ、生徒の学びを支援する。ただし、緊急時に対応できるように、安全面には気を配り、生徒の動きを注意深く見ることも大切である。</p> <p><中間の振り返り> 中間の振り返りの時間が設定可能な場合は、巡回時などに行う。生徒の感じたことを生かし、よかった点、改善すべき点などを明確化し、その後の活動の方向性をはっきりさせる。達成感、自己有用感が確かなものになるようにする。</p>	<p><巡回時> 受入れ施設・団体等の職員とのつながりも重要である。生徒の様子や学校の取組みに関し意見を聞き、指導に生かす。</p> <p><アンケートの実施> 訪問時などに、アンケートを依頼し、生徒の動きや学校の姿勢などについて意見を聞く。その結果を事後指導や次年度の改善に役立てる。</p> <p><中間の振り返り> 中間の振り返りが実施可能である場合は、相手方の業務に支障がない範囲で参加してもらい、生徒への助言や指導を行うよう依頼する。</p>
事後指導（活動後）	<p><表現活動> 生徒が感じたことを表現させ、周囲から認められるようにすることで自信をもたせる。</p> <p><成果と課題の明確化> 自分の目標の達成度を意識させ、体験活動の成果と課題を明確にし、整理させる。活動中に注意を受けた点や失敗したと認識している点は反省させた上で、課題を明らかにさせ、今後の活動につなげていく。</p> <p>【評価の観点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○課題意識をもって体験できたか。（課題意識） ○自分が設定した目標に向け、主体的に活動したか。（主体的な取組み） ○知識の理解や活動を通して、意識や行動に変容がみられた。（意識や行動の変容） ○自分の活動が社会に役立ったか。（貢献） ○奉仕体験活動で学んだことを明確にできたか。（振り返り） 	<p><報告と御礼> 活動終了後、学校として礼状を送付したり、直接訪問したりする。 また、生徒の感想文や提出物などの活動に関する生徒の動きなどにかかわるものは、可能な限り提供する。受入れ施設・団体等に生徒が感じたことなどを伝える。活動後2か月以内に上記の報告は完了させる。</p> <p><受入れ施設・団体等へフィードバック> 事後指導やまとめの時間などには、受入れ施設・団体等の関係者を招き、可能な範囲で参加してもらう。</p> <p><連絡協議会の開催> 施設・団体等の関係者を学校に招き、意見交換する。学校は、協議内容から次年度に生かすポイントを探す。</p>

（*1）ビデオ教材は、東京都教職員研修センター内の人権教育資料センターにあり、貸出可能である。

IV 教科・科目「奉仕」導入の準備過程と留意点

ここでは、教科・科目「奉仕」の準備を円滑に行うための、学校としての取組み例を示す。



V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

(1) 「奉仕」の学習内容の明確化

① 「奉仕」の学習過程

「活動の前に考えよう」では、「奉仕」を学ぶ意義、奉仕活動の歴史や社会の仕組みなどの内容を扱った。奉仕活動の意義を知り、社会や人にとって大切な活動であることや多くの人々が積極的に取り組んでいる実態を理解し、奉仕活動への理解を深めることをねらいとした。

「実際に活動してみよう」では、都立高等学校の実践事例、体験活動の計画立案など実践に必要な知識や活動の内容・方法を扱った。多様な奉仕活動を知り、自分の活動内容を考えて計画して、充実した活動を行うことを目指した。

「活動をまとめよう」では、活動の振り返り、活動のまとめと発表、自分の在り方生き方について考察する内容を扱った。継続的に奉仕活動に取り組んでいこうとする意欲を高めることをねらいとした。

② ワークシート等の活用

生徒の学習に沿って、ワークシートを活用できるようにし、考えたり、調べたり、振り返らせたりする活動を学習場面に位置付けることが大切である。

③ 実践事例の紹介

10の活動分野について都立高等学校による多様な取り組み内容を紹介し、生徒が「奉仕」の理解を深め、自ら活動内容を決定できるようにすることが重要である。

(2) 指導資料の作成

① 内容の構成

教科・科目「奉仕」のとらえ方、事前の学習計画、実際の活動、事前指導、事後指導、年間指導計画・評価計画の作成、校内運営の在り方の7つの視点でまとめた。

② 作成上の工夫

- 指導上・実施上・組織上の留意点や配慮事項を明確にし、課題と対応策をまとめた。
- 授業の構想を立てる際の参考となるよう、授業開始までの準備過程や留意点の要点を示した。

(3) 「奉仕」推進者養成研修の在り方の提案

「奉仕」の目標及び内容の理解を深め、実践事例等について学ぶとともに、年間指導計画・評価計画や学習指導案を作成することを通して、校内における指導計画作成や授業実践の中心となる教員を養成する必要がある。

2 今後の課題

研究成果について、都の奉仕体験活動必修化実践・研究校等での活用を通して検証を行い、内容を充実・改善する。